

10/12/16



DOON UNIVERSITY, DEHRADUN
Semester Final Examination 2016

School of Languages

M.A. Integrated Japanese, Fifth semester

Course: SLJ 302: Advanced Text I

Date: 10/12/2016

Time Allowed: 3 Hours

Maximum Marks: 50

Note: Attempt All Questions from Section A, B and C.

Section A: 翻訳しなさい。

(Marks: 3*7=21)

① その法と云うのは、ただ、湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませると云う、極めて簡単なものであった。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れられないような熱い湯を、すぐに提に入れて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷する惧がある。そこで折敷へ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云った。

② 内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から顎の下まで、五六寸あまりもぶら下っている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また元の通り長くなったのを知った。そうしてそれと同時に、鼻が短くなった時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなく帰って来るのを感じた。

——こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない。

内供は心の中でこう自分に囁いた。長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら。